

---

# ハイスクールD×D 創成の人間

アリス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハイスクールD×D 創成の人間

### 【Nコード】

N6311U

### 【作者名】

アリス

### 【あらすじ】

テンプレだけど、主人公が神になってハイスクールD×Dの世界に行くことになった。はたして……次の更新はいつになることやら

… ( ; )

## 第一話

お…俺は一体どうしたんだろうか……………

確か、東方をされていてハイスクールD×Dの新刊が発売するという事でゲーマーズに買いに行つて……………そのあとに足が滑つて…マンホールに……………

はっ（ ;） もしかして……………俺…マンホールに落ちて死んだのか……………

折角なら子供を助けてかつこよく死にたかつたなあ…

『そんなあなたに転生チャンスが』

俺は驚いて不意に聞いてしまった

「だ、誰だ！」

そんな時に目の前に影が現れた

「呼ばれて飛び出てぶらああああああああ」

変態があらわれた

コマンド

たたかう  
まほう  
どうぐ  
にげる

射殺 ピッ

カチャッ

俺はどこからか銃を出して構えた

「その選択肢はダメーーーーー」

仕方ないあきらめよう…

「で、何の用だ？」

「いや、だから～転生したいかしたくないか？っていう話なのよ」

これはまさかテンプレなのか！？まさかのチャンスが俺にも！？でも、なんでなんだ？

「ぶっちゃけ、私があなを原作に介入させるとどうなるかが見たいからよ」

「ぶっちゃけちゃったよこの変態！」

ん？待てよ…俺……………しゃ」しゃべってないわよ

「被せんなよ！」

「ついついやってしまったのよ…」

「じゃあ、ちよっと雰囲気だしましょうか…」

変態の姿が段々と透けてきた…そして声が聞こえてきた……

『力が欲しいか？』

「どこのRPGだよ！？」

「なに雰囲気ダシテアゲタノに…」

「いらんわ！！」

「で？どこの世界に送ってほしくて、どんな能力が欲しいの？なん

でも良いわよ」

ふむ……ポクポクチーン！

「決まったぜ！」

「言ってごらんさい」

「東方の能力で、《ありとあらゆるものを否定したり上書きする程度の能力》を、そして、世界はハイスクールD×Dの神が生まれるよりも前に送ってくれ！」

「はてしなくチートね……まあ、良いわ……でもそこまでやるなら……  
……ブツブツ」

「どうした？出来るのか出来ないのか？どっちなんだ？」

「ねえ、あなた神になってみない？」

「は？イマナント言ったのでしょうか……」

「神っすか……」

「ええそうよ、一応神になれる器を持っているので神にしても問題はないのよ」

まじか……いや、待てよ……確かハイスクールD×Dでは原作時には神はすでに死んでるんじゃない？

「そね辺りは調整するから大丈夫よ、というかあなたが創造するから自分で色々いじれるから大丈夫よ」

ならよし！

「じゃあ、そういうわけなんで修業しましょ」

「あいあいさ」

〜数百年後〜

白い空間には一人の青年が立っていた

『力が欲しいか？』

「そのネタまだ引つ張るの!？」

「だってえ〜暇だったんだもん」

「さてと……そろそろ行くわ」

「ええ、そうね……じゃあ行ってらっしゃい水野有基」

「ああ……じゃあ楽しんで見ててくれよ」

青年はそういって、この世界から消えた……

.....  
.....  
.....



## 第二話（前書き）

とりあえず、更新です。駄文というか、続きを書くのが難しい。

## 第二話

「さてと……まずは色々とするかなあ」

そういうと有基は世界、神、人、悪魔、天使を創造し始めた

「次はつと……原作だと…次元の狭間でかがあったなあ…まあ、いずれ自然に出来るだろう」

「じゃあ、しばらくは修行でもするかなあ…」

（数百年後）

大体いろんな種族が生まれてきた。

ちらほらドラゴンなどが見えてきているので神も仕事をきちんとしているのだろう。

よし！そろそろ世界に入ってみても大丈夫だろう。

そんなわけでいってきまーいーす。

お、俺がこの世界に入ってきて…いちばん最初に目に入ったのは目の前で倒れている美少女である。

黒髪ロングのキリッとした感じ…どっかでみたことあるんだけど、とりあえず助けるとしますか。

「大丈夫か？」

side ????

我は生まれてから一人でずっと生きてきた。特に他人と触れ合うことなく遊んだりすることもなく、ただ一人で…

そんな我はある時油断していたのだろう背後にせまってくるドラゴンに気付かなくて、攻撃されてしまった。なんとかその時は逃げ出すことはできたのだが、怪我が大きすぎたのか体が重くてまともに立つこともできなくなってきたしまった。

「我はここまでなのか…」

そうつぶやいて、意識が遠のいてしまっていくと最後に「大丈夫か？」と聞いてくる声が聞こえてきた。この声を最後に我は意識を手放してしまった。

## 第二話（後書き）

オフィスってwikiだと男かもしれないって書いてるんですけど、この小説は自己満足なので、原作の設定を無視して自由に書いていこうと思います！

## 第三話（前書き）

忙しくて短いのですが、楽しんでもらえたら幸いです。

## 第三話

「大丈夫か？」

俺はおそろおそろ声をかけてみたが、よほど重症なのか反応がない。しかし…やばい！俺は怪我人の手当てをしたことがないので、どうすればいいのかがわからない。

だが、しかし！！能力を使えばいいのではないか！！ということに気付いた…俺の悩んでいた時間は一体…orz

まあ、とりあえず《傷、疲労を否定》

よし、後は魚とか木の実などの食べ物をとってくれば大丈夫だろう。

side ????

我はまだ生きているのか？確か最後に誰かの声を聞いて意識がなくなってしまったのだったな…目がとても重いが起きるとしよう。

最初に目に入ったのは洞窟の岩…ここは洞窟の中なのか？

「なんで我はここで寝ているんだ？」

やはり最後に聞いたあの声の主が助けてくれたのか？

あの声の主を探そうと感覚を広げて探してみた、どうやら川の近くに  
いるようだ。

我は気になってしまったので川のほうに向かって走っていき、近くの茂みに入ってさっきの人をのぞこうとしたら。

「おい、のぞき見るのならこっちにこい」といわれてしまったので近くに寄って、その声の主を見たら言葉を失ってしまった。

なぜなら……女のような容姿をしているのに、裸なので全身を見てしまったわけで……その……なんだ……男だったのだな……。

「どうした？　こっちにこないのか？」

いやいや、そっちに行きたくても行けないんだが……！

「とりあえず！　前を隠してくれ……！」

「ん？　ああ……！　ごめんごめん、もう大丈夫だからおいで。」

あらためてその男を見てみると最初にあんな感じの出会いをしていなければ、女の子と感じてしまったと思う。

「お前が助けてくれたのか？」

「そうだけど、体大丈夫だったか？」

「うむ、大丈夫だ。助けてくれてありがとう。我はオフィスという」

### 第三話（後書き）

オフィス…原作にセリフがあまりなかったので想像で書いてます。

駄文すみません。指摘してもらえるとありがたいです。



#### 第四話（前書き）

学祭が近いんで、長めに投稿します。二週間くらいあくかも……；

## 第四話

やばい！なにがやばいって？ラスボスの人と出会ってしまったことがだよ！！

とりあえず、自己紹介しなくては。

「俺の名前は水野有基だ。気軽に有基と呼んでくれよろしくな」

「有基というのか、改めてありがとう。助けてもらわなければ我は今頃死んでしまっていただろう。」

オフィスって原作だとラスボス的な存在で神龍と呼ばれているはずなのになんでここで他のドラゴンに負けているのだろうか？もしかして、まだ無限の龍神に覚醒していないのだろうか？ちょっと聞いてみよう。

「なあ？どうして、倒れていたんだ？」

すると、オフィスは下を向いて話をしてくれた。

本人曰く、まだ生まれてから何年かしかたっていないらしく、力の使い方もわからないところをドラゴンに襲われてしまったのだという。

なるほど……………いくらオフィスだろうと最初から強くはなかったのだな。

む……………よし！！

「オフィス！俺の弟子にならないか？」

side オフィス

我は最初この男がなにを言っているのかわからなかった。しかし、段々と時間がたつにつれて頭が働いてきて、我に返った。

そのときにようやく声にだすことができた。

「ほ、ほんとうにいいのか？」

我は生まれてからずっと一人でさみしかったのではないか。ドラゴンの仲間もいなく、あつたとしてもすぐに襲われてしまう。

だから、我は確認のつもりだったのだろう。いままで一人だったから誰かに優しくもらうこともなかったから……聞き間違いではなかったのだろうというために。

我は質問の返事が、もしも否と返ってきたとき……また孤独になつてしまうのではないか……もう、孤独は嫌だ。一人は嫌だ。だが、この男が返してきた返事は……

「もちろん！強くなれば他のドラゴンになめられることもないだろうし、なにより一人って結構寂しいだろ？だから、一緒に生きていこうぜ。」

我はこの瞬間大声をあげてなかった……。

side out

オフィスは急に泣いてしまった。

俺は内心とても焦っていた……俺………一体なにをしたんでしょうか？

神よ！俺は一体どうすればよろしいのでしょうか！！

変態『呼んだかしら？』

変態が来てしまった…この際、変態でもいい！俺はこんなときどうすればいいとおもう！？

変態はちよつと溜息をついてから答えた。

変態『そんなときは抱きしめて頭を撫でればいいとおもうよ。

…そうすればフラグもたつでしょうからね…』

おお！変態！！いつになく役に立つなあ！ 最後の言葉は）

。（アーアーきこえない

俺は変態に言われた通り、抱きしめて頭を撫で撫でしてみた。

すると、どうしたことだろうか…オフィスが腕の中で気持ちよさそうに眠ってしまった。

フ…変態よ今回ばかりは助かったぜ。

変態『別にいいのよん！私は見ててとてもおもしろいからねん！じや、私はまた上から見てるわね。』

変態はまたどこかに行ってしまったようだ。しかし、子供っぽいオーフィスも…ありだな！…とりあえず、オーフィスが強くなって一人で生き残れるまで、めんどろみでやることにしますかな。

（後日）

「さて今日から修行を開始する。」

「うむ！」

「俺のことは師匠と呼べ！」

「うむ！師匠！」

ここまででは良かったのだが……修行って何すればいいのだろうか…俺が神になるための修行は地獄すぎるためにオーフィスにはできないだろうし、漫画とかで出てる感じの修行でもすれば、強くなるだろう！

実際にやってみた……………

「いいか！魔力の使い方はババーンとやってポポポーンってやるんだ！」

「わかるか！？って、できた…」

「こつやってだなあ、感謝の正拳突きを一日1万回！」

「これ…意味あるの？」

「フ…甘いな弟子よ。これを毎日やればこんなものをだせるようになる！」

後ろに何かが見れる！

「師匠…私もやるぞ！私もそれを出してみたい！！」

「今日は合気道という武術だ！」

「なんか、初めてまともな感じのものだな。」

「本に書いてあるから後はがんばってー」

「本当にお前は師匠なのか？」

〈数百年後〉

「これまでよくがんばったな。」

「あんな修行を我ながら頑張った…。」

ついにオフィスはこの世界で俺を数えなければ最強じゃね？ってくらいまで強くなった。

「修行が終わった記念に何か一つだけ願い事をかなえてあげよう。」

「武器か？金か？土地か？なんでもいいぞ。」

side オフィス

ついにこの時がきた…修行が終わったのである！

そして、師匠がなんでも願いをかなえてくれるらしい。

我は最初、土地をもらおうかと思った。しかし、今は土地よりもほしいものがある。それは師匠という存在である。だが、師匠をください！と言ったところでもらうことはできない…。ならば……………。

「有基と一緒に居たい！」

side out

どうも、予想外の願いをもらって戸惑っている有基です…。

こういうときはどういう反応を示せばいいのかが全然わからないのだが…これは告白なのか？いや、まてまて一回確かめてみよう。

「これはもしかして告白というやつですかい？」

オフィスは下を向いて言葉を呟いた。

「我もこの気持ちがあはわからない。だが、有基と一緒に居たいこの気持ちは本当なのだ！」

待て落ち着くんだ。そこまで考えてくれたのはうれしい。だが…ラ

スボスの人と愛し合ってもいいのだろうか？というか、そもそも女なのか？

「その…我ではだめなのか？」

クツ……いつのまに涙目上目づかいを習得したんだ…ううっ！もうムリムリ（ぐノ・・）ムリムリなにこの子かわいすぎるんですけど！限界が来そうです！がんばってくれ俺の理性！！

理性『そうです！私は負けるわけにはいかないのです！！』

本能『いけ！襲ってしまっんだ！お前も欲望にしたがったほうが楽だぞ。』

変態『そうよ！！襲ってもらったほうが私も楽し…もとい、おもしろそうなのよ！』

クツ……まさか変態まで出てくるなんて…もう我慢できなさそうだし…

「オーフィス。それは俺と夫婦になるといことなのか？それともただ一緒にいるだけなのか？」

「できるのなら、ふ／／夫婦になりたいです／／／／／／／／」

すまん！理性よ！俺にはもうムリだ…

「いったただきまーす！！」

「キヤアっ／／／／」



そのまま俺達は一カ月間ずっとやりっぱなしでした。

「もう…ハアハア無理……………」

「…\*ゞ(テヘッ やりすぎちゃった。」

#### 第四話（後書き）

忙しすぎてきつい！ 駄文だけど、応援してください！！感想待ってます！！というか、ください！

## 主人公設定（前書き）

風邪が治らないよお！！ 熱が39度のまま5日たちました……だ  
るくて何書いてるの？って部分があるかもしれませんが設定なんで  
書いてみました。

学祭出れなかったよおうあ” ああ …… ) …… あ  
ああ” あああうあ” ああ” ああ

## 主人公設定

水野有基

年齢 この世界に来た時150

原作開始時10億くらい

性別 男

誕生日 12月21日

血液型 A型

容姿 スパイラルの推理の絆のアイズ・ラザフォードの髪をダークブルーにした感じ

趣味 ゲーム、漫画、星を眺めること

好きなこと(もの) ゲーム、修行、他人をいじること、いたずら、おもしろいことならほとんど、シュークリーム

嫌いなこと(もの) 勉強、他人を見下すようなやつ、おもしろくないこと、野菜、きのこ類

性格 おもしろければなんでもやりそうな感じ 真面目な時でもふざけることは忘れない。

変態に殺されて暇という理由だけで能力をもらい、神にまでなったという嬉しいような悲しいような人。原作知識はあり、グレイフィアが一番好きである。

能力 《ありとあらゆるものを否定したり上書きする程度の能力》

神の修行により創造も使える

一応漫画の技、能力も使えるようになったが本人はあまり使う予定がないらしい

神

イメージは恋姫夢想の？ 蝉

## 主人公設定（後書き）

次はなるべく早めに投稿したいのですが、風邪を治してからになる  
かもしれません；

## 第五話（前書き）

短いんですけど書いてみました。結構寝れないんですよ。

## 第五話

オーフィスを襲ってしまつてから…十万年近くたった…。オーフィスとは愛し合つた後、2万年くらいしたら別行動をとることにした。なぜなら、オーフィスは実践をしたことがあまりなくて俺と一緒にいたら強くなるのがなくなつてしまふからだ。

そして…今俺はものすごくやばいです。なにがやばいつて？目の前にあのだよ！？あのグレイフィアさんがいるんですよ…！！

もうやばいですよ！俺の好きなキャラNO.1のキャラなんですよ！

「どうしたんですか？お兄さん」

話しかけられた…もう死んでもいいかも……

「いや、なんでもないよお嬢さん。」

ふう、危ない危ない変な人だと思われるところだった。

「そう。でもなんでこんなところにいるんですか？」

そう俺はなにを隠そうグレイフィアの実家ルキフグス家にお邪魔しているのだ。きっかけは間違つて転移をしてしまったのが原因である。とりあえず、グレイフィアにあつたので帰ろうかと思つていたら……。

「待ちたまえ…！！」



おそらくこの当主なのだろう、呼び止められてしまった。容姿は赤髪に灼眼、イケメンである。

「なんですか？」

「君がなにが目的でここに来たかはわからないが一緒に食事でもしていかないかな。君の話聞いてみたい。」

「なにが目的なんですか？一言言わせてもらいますけど、こんなどこにでも居そうな人を食事にさそうなんて頭大丈夫ですか。」

「一応大丈夫だと思うが…私としては君が気になるのだよ、魔力も一般人にはかなり少ない。だが、その奥に何か隠しているものがあるなにかまちがっているかい？」

この人…意外にすごいな…ルキフグス家って旧魔王派だから弱そうなイメージがあったが予想外だったなあ。

「それにだな…。君はおそらく私に似ている。」

は？この人は一体何を…？

「君はロングヘアーの巨乳で包容力のある母性的な人を見るとどう思う？」

こ、この人…まさか

「甘いですね！さらにメイド服を着るとなおいい！！いや、最高だ！」

「な！？やはり私の見こんだ通りだった！！君は私と好みが似ていると思っていたんだよ！」

『同士よ！！』

「俺の名前は水野有基という！有基と呼んでくれ。種族は一応人間だ！よろしくな」

「俺の名前はヴァンラザード・ルキフグスという！気軽にヴァンと呼んでくれ。種族は悪魔だよろしくたのむ」

まさか、この世界に来て久しぶりにあった人が俺と同じ考えの人だったとは…。

「よろこんで食事の件を受けよう！そして、俺と一緒に語りあおうではないか！」

「うむ！そういつてくれるとありがたい！では早速屋敷へ行こうではないか。」

こうして俺は屋敷へ行って食事を一緒に食べることになったのだ。た。

## 第五話（後書き）

I 駄文ですけど、楽しめたら幸いです。感想は気軽に送ってください

## 第六話（前書き）

眠くて適當になつて変なところがあるかもしれません。

作者風邪が治らない！；

## 第六話

（屋敷内へ）

へえ、さすがに偉い人だから家も結構でかいな。料理がこの時代だとどんなのが出るか楽しみになってきたなあ…。

「さあ。こちらだよ遠慮なく食べて行ってくれ」

そして、扉を開けた先には…な、なんだこの料理は！？なんておいしそうなんだ…初めてみるイタリア料理、フランス料理そして一番驚いたのが…なぜに白米？もうこの時代には白米なんてあったのか…俺は世界をまだまだ知らなかったんだなあ（主人公は勉強はできませんが、一般的なことはよく知りません。というか、作者も知りません。）なんか、今電波g…ん？いや、なんでもない。食べるよしよう

「さて、みんな席に着いたかな？」

ヴァンがみんなを席に着かせて号令をかけようとしていた。

「有基にはまだ紹介していなかったな。こちらは妻のアルセディ・ルキフグスである。」

「こんにちは有基さん妻のアルセディです。よろしくお願いしますね。」

「水野有基です。こちらこそよろしくお願いします。」

アルセディさんは黒眼で銀髪である。美人って雰囲気を出している母性的な感じがあるのでヴァンが引かれたのも納得できる。

「では、そろそろ食べるとしよう。グレイフィアも我慢できないらしいからな。」

「お、お父様／＼／＼はずかしいのであまりそういうことは／＼／」

グレイフィアははずかしさのあまりに真っ赤になってうつむいてしまった。

『ヴァン（有基）！　なんでこの娘はグレイフィアこんなにかわいいんだ！』

二人の声が重なって部屋中に響いた。その瞬間グレイフィアの顔がこれほどかっつくくらい赤くなってしまった。そして、プルプル震えてしまって怒りながらはずかしがっているという感じであった。

「お父様も有基さんもはずかしいのでそういうことは本当にやめてください！／＼／＼」

「あらあら」

アルセディさんはこの光景を見て微笑んで楽しそうに見ている。

「さて、鼻から愛があふてきそうだが食事にしようか。」

「ああ、そうだな俺たちは愛をあふれださせるわけにはいかないんだ。」

「それでは、いただきます」

『いただきます』

そして。食事が終わった後は…

「有基、旅の話聞かせてくれないか？最近たのしいことがなくてな。」

と頼まれたので俺はオフィスと出会った話、ドラゴンと戦った話、ひたすら修行していたことなどを話したのであったが。突然ヴァンが…。

「そついえば、有基の実力がいまいちわからないのでな。ちよつと私と勝負してもらえないだろうか？」

俺としては結構おもしろそうなのだが、ヴァンがどれほど強いのがわからないから真面目に勝負しても大丈夫なのだろうか。手加減すれば大丈夫かな。

「ああ、いいぞ。ただし俺は一步も動かず右手しか使わないがかまわないか？」

『な！？』

ヴァンは一応上級悪魔なのである。なので、それに右手しか使わず戦うというのだ。

「フ…私も馬鹿にされたものだな。上級悪魔相手に右手一本だど…？私に勝てるのは魔王様と後数人くらいだというのに…。それでか

まわらないが後悔するなよ？」

「もちろん大丈夫だ。」

俺らは中庭に出てヴァンと俺が向かい合い、グレイフィアとアルセデイさんが椅子に座ってメイドさんに紅茶をいれてもらってこちらを見ている。

「さてとそろそろはじめますか。」

「よし！でわいくぞ？」スッ

「ええいいですよ、どこからでもかかってきてください。」

ヴァンさんは姿勢を低くして両手を前に出していつでも攻撃できるという構えである。そして、俺は……

「それが君の構えか？」

「ええ、正直構えは人の自由だと思いますから。どうだっていいんじゃないですか。」

有基の構えは両腕をダランとしている構え、一見やる気のないように見える。

「では、私から行くとしよう！ハアッ！！」

ヴァンは右手を手刀のようにして俺の首を狙って振ってきた。それを俺は相手の手刀を弾いて、鎖骨、首、胸、首を狙ってカウンターを食らわせた。しかし、仮にも悪魔で強い方…首を狙った時に少し



ずらされた。

「ぐはっ！ く…まさかあの瞬間で四か所も攻撃されるとは思ってもいなかった。中々やるようだな。では、こちらから…なっ！？ 魔力を右手にまよえないだど！？」

おお、ようやく気付いたようだな。最初はただ攻撃しようかと思っただが、手に触れたところに魔力をまよえなくなる概念を付けて念には念をいれて、この方法をとった。

「ま、秘密つてところで」

遠くで見ていたグレイファイア達もこの光景には驚いているようだ。

「では、こちらからも攻撃していくぞ？」

みんなは動かないので魔法で攻撃するのかと思っていた。だが、有基の右腕が突然消えたのである。そして、次の瞬間ヴァンは見えないうなにかに頬を切られてしまった。

「これは一体？おそろくだが拳をただ突き出しただけなのか？」

「ああ、そうだけど見えたのか？」

「いや……なんとなくそんな予感がしたからかな？」

さすがに上級悪魔となると直感でも結構当たるものだな。

「これで終わりにするか。」

有基がそういつとデコピンの構えをしてヴァンの目の前に構えた。

有基がデコピンを放った瞬間…空気を弾いたようなパンっ！っ音が鳴り大気が震え空間にひびがはいった。その瞬間ヴァンは近くにあった木まで吹っ飛ばされてしまった。飛んでいった本人も見ていた二人にもなにか起きたのかはわからない。デコピンをしたと思ったら離れていたヴァンに何かが当たり、吹っ飛んで行ってしまった。

こうして、二人の戦いが終わってしまった。

「いやあ、ごめんごめんちょっと最後は力いれすぎちゃった。」

有基は軽いノリで言っているが三人には一体なにが起こったのかが今だ理解していないので説明を求めたら……………。

「ん？あれは魔力を指先に込めてデコピンをするときに拡散させるようにして、大気を弾く感じでやるとできるよ？多分三人もできるんじゃないかな？」

これを聞いた瞬間三人は…

『できるか—————！！！！』

これを聞いた使用人達は何事かと集まってきたそうです。

## 第六話（後書き）

感想をもらえると幸いです。



## 第七話

「そういえば有基は泊るところはあるのか？」

ん？そういえば最近は何の根元で寝たり、その辺に穴をあけて寝ていたりしたなあ。

そのことをヴァン達に話したら…

「よし！ならば家でしばらくの間暮らそうではないか！」

「それはいい案ですね、あなた。」

「そ、そうですよ何かあったら危ないですよ！」

おおぅ…まさかこんなことになるとは…しかし、グレイフィアは優しいなあ。この優しさ…ものすごい惚れちゃいそうだよ！！

「それは構わないが俺、お金とかないぞ？というか、迷惑じゃないか？」

「大丈夫だ！親友にお金などたらん！迷惑だと思つのならはこのグレイフィアの顔を見ってみろ！ものすごく心配しているぞ？逆に泊らないほうが迷惑になるぞ？寝れなくなってしまうぞ？それでもいいのか？」

「そうですよ、こちらの事よりもあなたのほうが心配なのです。是非しばらくの間泊っていただけませんか？グレイフィアの遊び相手にもなってもらいたいので。」

「そこまで言われたら仕方ないかこれからしばらくやつかいになるよ。よろしく頼む。」

「ああ、こちらこそよろしく。でも、よかったなあー？グレイファイア？泊ってもらえることになったぞ。」

「はい！とってもうれしいです！お父様ありがとうございます！」  
ゲフツ！ま、まさかこの俺がやられる瞬間が来るとわな…隣をちらっと見てみると俺と同じように死の境目をさまよう男がいた。そして、俺に向かってサムズアップして…………

「我が生に一遍の悔いなし……………」バタツ

「ヴああああああああああああああん！まだ死んじやだめだあ！」

「お、お父様も有基さんも一体どうしたんですか！？その鼻血の量は大丈夫じゃないと思うんですけど！」

「大丈夫だよグレイファイア……………ちょっと死神さんに挨拶してくるだけなんだ。だから死ぬわけじゃないんだよ。」

「そつだぞグレイファイア私が死ぬと思うのか？私はちょっとある川を渡ってくるだけなんだよ。きつと楽しいぞお？」

「有基さん！それは死んでます！お父様も三途の川は生きてるうちには渡れません！」

「あらあら、まあまあ。」

鼻血をだして倒れる俺とヴァン、焦って叫んでいるグレイフィア、それを見て微笑んでいるアルセイディさん………なんというカオス！！

俺とヴァンはなんとか一命をとりとめて屋敷へはいつてこれからのことを話そうとしていた。

「これから有基にはここですごしてもらうにあたっての注意点を言おうと思う。」

注意点？ああ、どこかにはいつてはいけないとかか？

「まずは………娘のグレイフィアを襲つてはいけない！！」

は？俺らの時が止まった………えーっと………それ当り前じゃね？

「それって当り前のことじゃないのか？常識的にそれはないだろ？」

「これは大事なことなんだ！むしろ注意点はこれだけだ！絶対守れよー！」

ヴァンって………ものすごい親バカなんだなあ、これほどとは………ある意味おそろしい………。

「あ・な・た？ちよつとOHANASHIしましょうか？」

「いや、待つんだアルセイディ………いや、本当にごめんなさいーちよつと待って………いやあああああああああああああ

「あああああ！！！」

「有基さんはグレイフィアと遊んでいてください。私はちょっとやることがあるので少々お待ちください。」

「サーイエツサー！！！」

怖かった…ものすごい怖かったよお。どれほどだつて？例えるならオーフィスにしばらく構わなかったときに包丁持って迫ってきた時くらい怖かった。

「とりあえず、グレイフィアちゃん何か話そうか？」

「はい！旅のお話をもっと聞きたいです。」

「そうだね、あれはかなり前に……………」

（3時間後）

「ただいま戻りました。グレイフィア楽しかったですか？」

アルセディさんが……………きれいな赤い何かを頭からかぶってドレスが真っ赤になって帰ってきた。きつと料理をしてきたのだろう。家庭的な女の人もいいよね！なに？現実逃避するなつて？實際目の前にそんな人がいたら逃げたくなるんだよ…。

「さて、あなた？お話の続きを話してもらえますか？あ・な・た？」

「はい！わかりました！」



ヴァンが順従な犬のように見えてきた…こんど一緒に酒でも飲んでやるか。

「注意点は二つ！他の悪魔が来るときは部屋の中に待機していること。家での食事はみんな揃ってとることです！以上です！」

おお、今回はちゃんとまともなことを言った。しかしそのくらいの注意点なら守れそうだなあ。

「了解だ。そのくらいなら守ることはできる。他に注意するべきこととはないのか？」

「後は特にないな。しいていうなら、グレッフゲフツ！！！」

こりないなヴァン………さてと、これを見ないように部屋に行くとするか。

「じゃあなヴァン！お前のことは忘れない…。アルセディさんとこゆっくり〜グレイフィアちゃん行こうか。」

そして、俺はグレイフィアちゃんを連れて部屋に行つて、物語を話してあげたんだ。ワンピースとかNARUTOとか…。グレイフィアちゃんは興味シンシンで聞いてくれたんだ。時折流れてくるぎゃああああとかいうBGMも最高だねw俺の心をゾクゾクさせてくれるよ。

そして、そのままグレイフィアは部屋に戻っていき就寝した。そして、俺はというと……

「ヴァン！やはりメイド服が一番銀髪に合うんだよ！！！」

「なにを言うか！！巫女服という意外なものに一番の萌えがあるんじゃないか！」

「ヴァンお前はそんなやつだったのか！！」

「有基もそんなやつだったのか！！」

『バカヤロー！！！！！！』

そして二人は朝まで語りあったり殴りあったりしていた…。

## 第七話（後書き）

風邪は治ったけど宿題がものすごい多いです。

## 第八話（前書き）

テニスの大会があったので更新がものすごい遅れました><

これからも忙しいので二週間に一回更新できたらいいなあ。

感想まっています！

## 第八話

そして時は10年以上たった……………。

「ヴァン？そろそろ戦争が起こると聞いたんだが…大丈夫なのか？」

「有基か…大丈夫だ。お前は家で待っていてくれればいいんだよ。」

そう、なにを隠そうこれから原作でもあつた戦争が起こってしまうのである。といっても、何年も先なのだけれども…。

「有基さん、あなたは家で待っていて私たちの帰りを待っていてください。それが今のあなたにできることです。でも、危なくなってしまうのでまた旅に出てもよろしいですよ？」

グレイファイアも心配してくれているみたいだ。だが、俺はそんな簡単には死なんよ！！話は変わるけどグレイファイアも原作の様に成長しているのである。かなりの美人です！

「そうか…なら俺はお前らの側にいて守ってやるよ。それくらいなら構わないだろ？」

という三人はビックリしていた。

「確かに有基が強いのはわかるけどなんで俺たちにそこまでするんだ？」

「それは決まっているだろ？しばらくお世話になったんだ恩返しというやつだよ。」

「そうか、じゃあグレイフィアだけを守ってくれないか？俺たちは大丈夫だから…でもグレイフィアだけは心配だからよろしく頼むよ。」

「こいつら…死ぬ気だな。だけどそこまで言うのなら守ってあげるとしますかね。」

「了解した。ならば俺はグレイフィアを必ず守ろう。だからお前らも死ぬんじゃないぞ？」

「ありがとう。そしてお前ならグレイフィアの嫁にふさわしい！だから今すぐ二人は結婚してくれ。そして………」

「……俺に孫を見せてくれよ！！」

俺としてはそれはものすごく嬉しいのだが……しかし………」

「結婚しても構わないのだけれども俺はもうすでに一人の女性と関係をもっているんだがそれでも良いのか？」

「大丈夫だ！今の世の中一夫多妻だから問題ない！」

「いや…しかしグレイフィアはそんな男でも良いのか？」

グレイフィアは下を向いて静かに呟いた。

「私はあなたをお慕いしております。その事実は変わりませんが、あなたが私を関係を持った女の人と同じくらい愛してくれるのなら結婚しても構いません。それが私の答えです。」

グレイファイアがそこまで考えているなんて考えもしなかった。しかし、そういうことならば俺の答えは決まっている。

「それは当たり前だろ！俺はグレイファイアも愛することができるところから増えるかもしれないけどそれでも良いのならば俺と一緒になつてもらえますか？」

「はい！これからも一緒にいきましょう！」

「よし！両想いということなら結婚しても問題はないな！これでやつと孫の顔を見ることができるのか。」

「そうですねあなた。二人の子供ならさぞかし可愛らしい子供が生まれるでしょう。」

「じゃあ今日はパーティーだな！四人だけになってしまっけどそれでも良いな！」

そしてパーティーをかなり盛り上げて終わりを迎えた後、俺の部屋で……………

「なりゆきで結婚してしまったが本当に後悔していないのか？」

「あなたは何回言わせるつもりなんですか？私はあなたをお慕っていますと言っているじゃないですか。」

そくだよな…俺はなにを言ってるんだろうか、こんなにも好きでいてくれる相手に向かつて…妻になるのなら俺も隠し言をしてはいけないのかな。

「グレイフィア、お前に俺のことを全部話そうと思う……………」  
（説明中にゃー）

「これが俺の今までの人生かなあ、神になってこの世界を作り、人や悪魔、天使、神、生物を作った。後悔はしていないけどな。」

俺は誇らしげに天井を向いて話しかけた。

「そうなんですか…そんなことがあってもあなたは精神的に大丈夫なんですか？つらかったのでしょうか……………」

「まあ最初は一人だったからつらかったけど、今は全然大丈夫だよ。なんてつたつて、こんなにかわいいお嫁さんができたんだからな。だから隠し事はしないって思ったんだ。」

そう、他にもオフィスもいるしな。俺はもう一人じゃないんだ。

「そうですね、オフィスさんもいますしこれからもまた増えるんでしょうですね。」

「増えるかはわからないけど、一人じゃないのは確かだな。さてと、そろそろ寝るとしますかな。」

「寝る！！／／／／／、そうですね！心の準備がまだできていないけどよろしくおねがいします／／／／／」

やばいつすオフィスの時みたいに自分を我慢できなくなってきた  
————可愛すぎるんですけど————！！！！



「じゃあ、いくぞ?」

「はい……。」

そして俺たちは一つになった?一つだけ言わせてもらおう!ものすごく気持ちよかった…。

〈そして数年後〉

この数年で色々な事があった。とりあえず、子供が生まれたことかな。次にグレイフィアとの結婚が悪魔に広まったこと。そして…一番の出来事は……… オーフイスとグレイフィアが初めて会ったことかな。あの時はものすごく焦った。オーフィスに何も言わないまま結婚してしまいその噂を聞いたオーフィスが家に突撃してきたんだ。

〈回想〉

ドカーン!!!!!!

「て、敵が来たのか!?!」

最初に反応したヴァンが叫んだ。そして俺は三人を守るように前に立った…その瞬間こちらに殴りかかろうとしている影が!!

俺はそれを体を少しずらして避けた、そしたら相手が足で蹴ってきたのに気付いて避けようとしたのだが突然の相手の叫びによって動きを止めてしまった。

「有基の浮気者————!!!!!!」

ま、まさかこの声は……………オーフィスカ!?

驚きによって攻撃をモロに受けてしまい意識を手放してしまった。

俺が意識を取り戻したのは数時間後であった。目が覚めてすぐに周りを見回してみるとグレイフィアとオーフィスが酒を飲み、お互いに何かを悟った様な目で話しあっていた。

「はあ…有基さんをオーフィスさんと二人で愛するのはいいんですけど、後何人くらい増えるんでしょうかねえ……………」

「我もそう思うぞ、あと何人増えるんだろうか…。まあ、何はともあれグレイフィアこれから同じ人を愛する者同士仲良くしていこうではないか。」

「ええ、これからよろしくお願いします。」

俺がいない間に一体何があったのでせうか…?ちょっと聞いてみることにしましょうか。

「あの〱御二人さん?一体何が起こったのでしょうか?俺が気絶してる間にどこまで進んだの?」

や、やめるんだ!お前居たの?みたいな目はきつすぎる!

「はあ……………なんでこんなのに惚れてしまったのでしょうか…」

「我もそんな気持ちだからよくわかる。でも、なんでなんだろうかの？」

「とりあえず説明をするのなら、あなたが気絶してから有基さんの知り合いかもという感じの空気になって、名前を聞いたところ有基さんの妻ということだったので私とお父様、お母様で挨拶をしました。それからご飯を食べて行きませんか？という話題になりました。お父様とお母様がお酒をここに置いていき二人でお話していなさいというわけでここでお話をしていたところ、あなたが起きてしまったというわけです。」

なるほどそこまで進んでいたのか。

「で、有基よ我に何か言うことはないのかの？」

「すみませんでしたー！」

この時の俺はものすごい輝いていた。何がかって？空中捻りを加えた三回転半のジャンピング土下座がだよ……オフィスが起こつたら俺でも手に負えないからな！言ってる恥ずかしくなってきたけど。

「まったく今回は一応許すがこれからは我にも一言相談くらいしていいじゃないか。悪魔の中で有基が結婚したと聞いた時は、我に飽きてしまったのかと思っただぞ？」

「まったくそんなことがあるはずがないだろ！俺は愛すると決めたらずっと愛して大切にすると決めてるんだからな。」

「そのセリフを恥ずかしがらずに言う有基もすごいわね。」

「そうじゃな、だがそこに我は惚れてしまったんじゃからの。」

俺はこんなにも愛されて幸せすぎるんですけどー！

「で、気になったんだけど俺はどのくらい気絶してたの？」

「んー大体5時間くらいかの？我も結構強く蹴ってしまったから。」

5時間かあゝ大分気絶していたんだな。5時間あれば……カップラーメンを100個作ることができちゃうね！すみませんテンションが上がってしまったんです。だから、そんな冷たい目で見ないでください！

「で、結局オフィスに何も言わないで結婚してしまったけど、こんなだらしない男はもう嫌になったか？」

「フ…いまさら何を言っておるのか。そういう所も含めて全部好きだから有基の妻になりたいと思っただけである。これからも何人も増えると思うがの！だから、これからは一言くらい言ってから関係をもってほしいのじゃ！」

「了解！これからはちゃんと相談しますよお姫様。」

そしてグレイフィアが話しに入ってきた。

「そろそろ夕食の時間だと思うから食堂に行きましょうか。」

そして俺たちは食堂に向かった。そして夕食を食べてオフィスがまたどこかへ飛んで行った…。

～回想終～

まあ、こんなことがあったんだよ……。で、そのあとに子供が生まれ、名前をミスティアとグレイフィアが名付けた。ここで驚いたのが原作でのサーゼクスとの子供の名前と同じだったことだ。きっと原作でもグレイフィアが名付けたのだろう。

さあこれから戦争が起こるんだな！グレイフィアを守らないといけないなあ～と思っていた瞬間！

足の下に穴が開いて落ちて行ってしまった。

## 第九話（前書き）

遅くなりましたが一応書き終えました！

誤字脱字がある場合は教えてもらえたら幸いです！

駄文ですけどよろしくですー

## 第九話

「あの変態野郎がああああああああああああああ」

（最初に来たことのある白い空間）

「おい！変態よ何故俺をここに呼んだんだ？これから戦争だということ…。」

「そのことなんだけれど…あなたがあの世界にもう少しいたら世界そのものが無くなっていたかもしれないよ……………」

俺が作った世界なのに俺のせいの世界がなくなるだって？

「それは一体どういうことなんだ？俺のせいってどういう意味なんだ？」

「あなたはものすごく強いそれはもう世界が束になってかかっても勝てないくらいに…………でもこの戦争で神が死んでしまう…それは変えられない運命なのよ。神がいなくなったら貴方が暴走したときに止める存在が居なくなる。簡単に言ったら貴方の域に達しているくらい強い存在がいらないから貴方という存在を消すか、世界が崩れるかのどちらかなのよ。だけど、貴方は強すぎる…。それはもう世界が勝てないほどに…………だから世界が崩れるしか方法は無くなるというわけなのよね。」

「なにか止める方法があるからお前は俺をここに呼んだんだろ？このまま世界が消えるのもおもしろくないだろうしな。」

「ふう……よくわかったわね。そうよその通りよ…解決する方法はいたって簡単強い存在が居ないのならば作りだせばいい要するに、強い使い魔を作りだせば世界が壊れることもないし貴方も生きていられる。」

使い魔か…どんなのを作ればいいのだろうか……。

「使い魔ってどういう風に作り出すんだ？なんか念じればでるとか？」

「いえ、作りだすのでは時間がかかるから生きている生物で強そうなのを使い魔にすればいいのよん。」

強そうな存在か……オーフィスは確実に最強クラスだけど使い魔にしたくはないしなあ…ん〜よし！

「グレートレッドなんかはどうだ？結構強いと思うんだけど。」

「まあ、それくらいなら大丈夫だと思うけど使い魔にするのはとても大変よ？大丈夫なの？」

「それくらいのことができなければ、これから先も誰かを守ったり、救ったりすることもできやしないだろ。」

「まあ、いいわ今ならグレートレッドは次元の狭間にいるだろうかからそこに直接送るわよ。」

「色々とまた迷惑をかけたな。」



「いいのよ私も楽しませてもらってるんですもの。」

「じゃ、またいずれ会おうな。」

「ええ、じゃあの星の彼方へ飛んでいけー」

そして俺は星を超えて光並のスピードで飛んで行った。

〈次元の狭間〉

「ここにグレートレッドがいるのか。」

頭についているというかさつきできたばかりのタンコブを擦りながら辺りを見ていると、目の前に紅い大きなドラゴンが現れた。

《我に何か用か？人の身でありながら中は人ではない者よ》

頭に直接話しかけるような声が聞こえた…。その声を聞いて俺は

「頭に響くような声が聞こえるなあ…。目の前のドラゴンが話すわけではないもんねーきつと頭がおかしくなってしまうんだな。ちくしよー！この頭め！」

頭を創った壁に打ち付け続けた……。いや、グレートレッドは言葉を話しそうだとは思っていたけど…。実際聞いてみると驚くよね。だけど、俺はネタに走る！なぜならそっちのほうがおもしろそうだから！！

ガン！ ガン！ ガン！

《い、いやちょっと我の話しを聞いておるのか?》

ガン! ガン! ガン! ガン!

《もしもし……………》

ガン! ガン! ガン! ガン!

《いいから落ち着かんかー!ー!ー!ー!》

テレレレッテッテ

グレートレッドのレベルが上がった。特技ツッコミを覚えた。状態キャラ崩壊になった。

《ナンデヤネン ）。 。 ノ（ノ》

「さて…落ち着いたところで用件を済まそうか。」

《やっと本題に入ったか…。で、何の用でここに来たのだ?》

「実はカクカクシカジカってわけなんだよ。」

《なるほどまるまるつまつまというわけなのだ……………ってそんなんで通じるかー!ー!ー!》

テレレレッテッテ

グレートレッドは特技ノリツッコミを覚えた。

《またか！？そんな特技はいらんわ！！》

「これで俺の相方を目指せるね！」

《もう何も言わぬ……………それで本当の用件は何なのだ？》

「実はだなあ……………」

（説明中）

べ、別にめんどくさいとかじゃないんだからね！ほ、ほんとなんだからね！

《ふむ……………なるほどのう……………世界の危機とな……………》

「そうなんだよ……………で、強い使い魔を作らないと世界が無くなってしまふんだよ。本当は俺が素直にどこか他の世界に行くか、消えたほうがいいんだけど……………この世界に大切な人ができちゃったから消えることはできないんだよ……………」

俺にはオーフィス、グレイフィア、ミステイアその他の人達…大切な人がたくさんできた。だから、このまま死んでしまふわけにはいかないんだよな。

《使い魔になったら何か特別な制限とかかかるのか？たとえば常に側にいなきゃいけないだとか、力の制限だとか。》

「そついうのは特に無いが、一応俺の命令には逆らえないらしい…。命令する気もまったくないけどな。」

《使い魔にされるのだから何かメリットはあるのではないか？》

んーさすがに長生きしているからそういうことには鋭いか……。

「メリットは俺の力の一部を使えるようになることと、本来の力が何倍か上がることだな。デメリットはさっき言った逆らえなくなることだな。」

《お主の力の一部とは一体どういうものなのだ？》

「俺の力は色々あるけど、使えるようになるのは創造の力だな。試しにやってみせるけどそんなにすごいものでもないからあまり期待しない方がいいぞ？」

創造

「っとこんな感じかな。お前が使うのは完全に使いこなせはしないと思うからもう少し創造に時間がかかるかな。」

《……………》

「ん？どうかしたか？」

《そんなことができるのは、創造神くらいのものではないのか！？  
というかお主は一体何者なのだ！？》

あゝそついえは俺の事は何も話してなかったなあ…。

「じゃあ、まずは自己紹介でもしますか。俺の名前は水野有基 ち

よつとおちやめな世界の創始者で一応神？創造神でもあながち間違つてはいないぞ？」

《創造神だったのか…なおさら試してみたくなつた……………。》

え〜つとこれはとつても嫌な予感がしてきたなあ…。

「ちなみに聞きますけど一体何を？」

《もちろん實力試しだよ！！！！》

言葉を言い終わると同時にグレートレッドがこちらに突っ込んできた。

「うおい！」

俺はそれをその場から真上に飛ぶことによつて回避した。だが、さすがに最強の一角それを予測していたかの様に上空に小さい火の玉を無数にだしてきた。それを避けるのが普通なのだが、有基は受け止める体制に入った。

《ばかな！受け止めるだと、無理なことをする。》

グレートレッドは無理だと思いつきに攻撃をしようとしていた魔力をためるのを止めて、戦いもこれで終わりかつまらんと思っていた。しかし火の玉が当たれば爆発して普通、大怪我は免れないはずだった……。そう、はずだったのだ……………。

有基は火の玉を避けず受け止めようとしたのではない、避ける意味が無かつたのだ。

## 火の玉を否定する

火の玉が目の前で消え去ったことにグレートレッドは疑問に思っていた。何故全力で放った火の玉をいとも簡単に消すことができるのか。魔力無効果だと思ったが魔力が拡散したのではなく急に消え去ったのである。到底理解のできることはなかった。しかし、まだ勝負の最中、攻撃を休めてしまったグレートレッドは次の行動をするのが遅くなってしまい有基に近づく時間を与えてしまった。

《し、しまっ…》

有基がグレートレッドに手を当てるのと同時にドンッ！と音がでて血を噴き出した。手を当てた時に魔力を中に流し込み内臓を破壊したのである。

このままでは無限に落ちていくかもしれないと思いき有基はグレートレッドのすぐ下にかかなりの大きさの足場を作り、その巨体を持って飛んでいき寝かせた。

「ふう…これで大丈夫かな。後は 傷、疲労を否定し、完全な状態だったときを上書きする。」

これで、傷も無く疲労も回復して魔力も元通りになったはず……。そう思って自分もすわろうとした瞬間グレートレッドの体が光って目をあけられないくらい眩しくなった。

「くっ…一体なにが起こっているんだ。」

光が止んで目をあけられるようになって、辺りを見回していると…  
…。一人の長髪で紅髪の美人なお姉さんが現れた。

「へ？一体どうなってるの？グレートレッドが急に女の人になってしまったぞ？」

俺は混乱してしまい何がなんだかわからなくなってしまった。

「う…う…うん…我は一体…？」

「ここは時空の狭間でこの足場は俺が作ったもの…で、君は誰？」

「む…さっきまでお主と戦っていたじゃろ…グレートレッドと呼ばれている者じゃ。」

## 第九話（後書き）

感想待ってます！



## 第十話（前書き）

いつも通り短くて駄文ですけど、見てくれたら幸いです！

感想まっています……できれば批判以外で；

## 第十話

この人がグレートレッドだった？

ちよつとまで……これがグレートレッドだと？ずっと男で年寄りかと思っていたんだが……

「ちよつと確認させてくれ……君はグレートレッドで」

「そつじゃ。」

「女の子？」

「うむ！人化すると何故か最初はこの姿になってしまつたのじゃ。そこから変身すれば男にもなれるのじゃが……」

なるほどまとめるとこついうことが……。

グレートレッドは人にもなれるけどなるうとしたら女の子になつてしまう。一応変身もできると……。あれー？原作じゃこついうのはない……というか覚えているのはごくわずかだから続きを読みたかつたなあ……。というか、原作を最近思い出せなくなつてきた……。

「なるほど……それで俺の使い魔になることは承諾してもらえるのか？いやなら無理には言わないけど……」

しかし、もしここで断られてしまつと……使い魔がない 世界が終わる それなら俺が消える オーフイス達が悲しむ ある意味世界崩壊もありえ……ないな！そこまで俺はモテないはずだしな

……。

「負けたし一応私の力も上がるのなら使い魔になって絶対服従でもメリットの方が大きいからなっあってやってもよい。」

「おっしやー！ー！ありがとー！」

「で、どうやって使い魔にするのじゃ？何か契約陣みたいなのを使っつてやるのか？」

あ…その辺は全然知らないや…。

変態『大丈夫よん！そんなときこそアタシの出番よね！』

こんなときしか役に立てない変態が来た……。

『役に立たないとは失礼ねん！教えてあげないわよ！』

「すみませんでした！」

俺はこの時だけものすごく輝いていたと思う……その場にいたもう一人にはものすごく引かれたけどな……だって、何も無い空間に向かって土下座するんだぜ？誰にやってるの？頭大丈夫？的の人に認定されるよ……。

『まあ、いいわ…さて、使い魔にする方法だったわよね？それは簡単よ！魔法陣は私が書いてあげるからあなたとその子はその上に立ってキスするだけでいいのよ！』

俺は今こいつがなにを言っていたのかわからなかった……キス



「じゃあ、いくぞ?」

キスした瞬間お互いに何かが駆け巡った……そして魔法陣も光って辺りが真っ白になった。

「ふう…これで契約も終わりか…むぐう!？」

離れようとした瞬間グレートレッドがさらに近づいてきて舌を入れた。

「ちゅ……ペロ…ピチャ……」

しばらく二人のというか一方的な深いキスをしていた。

「ぷはぁっ！おい！なんで舌を絡ませるんだよ！てか、普通にキスして終わりでいいだろ。」

「我だってこれだけ生きてるんだ。たまにはこんなことしてもばちは当たりはせぬわ。それに結構いい男じゃしのお。そうじゃ我を愛人してみないかの？本妻は他のやつに譲るとして。」

「そんな軽い気持ちで物事を決めちゃだめでしょ!」

「最初は軽い気持ちだったのだけれどな、お主と契約することによって芽生えてしまったのじゃ。我はしつこいからあきらめることじやな。」

俺はもう何も言わないよ……。

「しつこいというのなら俺も覚悟を決めてやる！最後にもう一度だ

け聞くが…本当に俺でいいんだな？」

「しつこいぞ…我がいいというのだからそれでいいのだ。何も問題はあまい？」

「ぶ…あつはつはつは！…そうだな、グレートレッドくらいになるとそれくらい強欲じゃないとな！」

「うむ！正妻にもいずれ挨拶をしなければなるまい。しかし、今くらいは自由にさせてもらっても構わないじゃろ？」

「そうだな」

そして俺は強引に唇を奪ってそのまま……………。

18禁だからダメだよ！あれ？でも少しくらいなら……………

「ああん！そこはダメじゃ！激しすぎて死んでしまっ！」

「まだまだいくぜ！」

「ちょ！お主何時までやるつもりじゃ！我が壊れてしまっではないか！」

「大丈夫壊さないように頑張るから！」

「あああああああ！…激しすぎるうっうっうっうっうっうっうっうっうっ！」

開始から2日二人は激しく絡み合い愛し合い壊れる寸前までやり続

けた。  
(何がとはいっちゃだめだよ！)

## 第十話（後書き）

ここからは関係ないんですけど……作者腰を完璧にやったみたいで下手したら手術っぽいです……椎間板ヘルニア+腰椎分離

その他、喘息とかテニス肘とか……もう死ぬんじゃないかって思ってます。



## 第十一話（前書き）

明日から修学旅行があるので、とっても鬱になってきました…（、・、）

駄文で短いですが読んでもらえたら幸いです。

## 第十一話

そして、それから数時間…お互いに落ち着いてからまた話しをする  
ことになった。

「そういえば、有基の体は一応人間なんじゃろ？」

「一応人間の体だと思うぞ？精神が神になったという感じだと思う。」

「それならばこれを授けたいのじゃが……。」

そういつて空間からとり出したのは一本の日本刀。

「これは昔、神が神器を作り始めた時に我のところに持ってきて…  
【この刀はすべての神器の力を宿した物、持った者の力が一定時間  
ごとに倍増し、触れた相手の力をすべて半分にしていくという刀。  
これを使うことができるのは人間だけなのだが、もしも君が認め  
た人間が現れたらこれを授けてやってくれないか。】と言ってきて  
今まで忘れておったのじゃが有基なら人間でしかも我が認めたの  
からこれを使いこなすことができるのではないか？」

俺は刀を受け取り抜いてみると刀身は真っ赤で、柄は真っ黒である。  
持った瞬間に俺の中にあるすべての力が何倍にも膨れ上がったの  
を感じた。

そして俺は同時にこうも思った。（ああ…どこまでチートになれば  
いいのか……）

「これは使うか使わないかは有基の自由にして持っていてくれ。」

「いずれ使う時がくるかもしれないからありがたくもらっておくよ。」

そういつて有基は刀を自分の影の中にしまった。

「じゃあ、俺はそろそろ元の世界に帰るとするよ。色々ありがとう  
な、また会いに来るから。」

「中々会いに来なかつたら我から会いに行くから大丈夫だ。それに  
力をもらったからそこらの奴らには負けはしない。」

「まあ、その通りだな。もしかしたら俺の嫁が会いに来るかもしれない  
から仲良くしてくれよ？名前はオーフィスって言っただけど。」

「ふむ……嫁とは無限の奴だったのか……。それなら大丈夫じゃ。  
あ奴とは面識があるからの。」

面識があるけど、仲がものすごい悪いとかじゃないよなあ。

「その通りかなり仲が悪いぞ。」

「何故心の声があった!？」

「顔に出てたからのぉ。心配そうな顔してたぞ?」

「ははは……その通りだよ仲良くしてもらわないと、こっちも色  
々と苦労が絶えないんだよ。」

「有基関連でこれから仲良くできそうだから大丈夫じゃ。」

「それならいいんだけど……じゃ、元気だな。」

「うむ！それじゃあ。」

そして俺は光に包まれて元の世界に戻っていった。

（元の世界（戦争中））

side グレイファイア

有基が突然消えて、神（変態）から『ちよつと借りるわねん』と念話があった時はとても驚いた。しかし、神という忙しい役職？があるのだから、ただの悪魔でしかない私と一緒にいるだけでも大変なのかもしれないという気持ちもでてきた。そして、有基が居ない毎日を送り、ミスティアを育て、鍛錬を毎日やり続けて、いつ戦争が起こっても大丈夫なようにとにかく頑張り続けた。そして、今日ついに戦争が始まった。最初はこちらが押していたのだけれども消滅の魔力を持ったグレモリー家の悪魔がたった一人で攻め込んできて段々と劣勢になったきってしまった。そして私は我慢できなくなっこちらも攻めにいった。いや、いつてしまった。誘われてたと気づいたのは私が隊を離れてしまったときだった。

「皆の者！敵の指揮官が出てきたぞ！全軍突撃せよ！」

相手の指揮官らしき悪魔が命令したと同時に大量の悪魔に攻め込まれて私は失敗してした。という気持ちと同時に申し訳ない気持ちになっってしまった。だけど、せめてあのグレモリー家の悪魔だけは打

ち取ろうとして、一騎打ちを申し込んだ。

「グレモリー家の者よ！ルキフグス家のこの私が一騎打ちを申し込む！」

相手は少し考える動作をして迷っていたが、何か決心したのかこう返してきた。

「よかろう！しかし、私は君に一目ぼれをした！だから私が勝ったら私の妻になってもらおう！」

私には有基という夫がいるのでこの申し出は断りたかった……。しかし、これを断ってしまうと一騎打ちをしてもらえない、仲間の犠牲を無駄にしてしまう。そう思い私はこう言った。

「私には夫がいる！しかし、負けたらこの身は死んだも同然その申し込みを受けて立とう！」

相手は夫がいるのに驚いた様子だったがこの返事に喜びを感じたのか、嬉しいのかわからないが、微笑んで言った。

「よかろう！君が誰かの妻であろうと問題はない！この勝負に勝って私が君を手に入れて見せる！私の名前はサーゼクス・グレモリー！私を恋に落としたあなたの名前を聞かせてもらおう！」

「私の名前はグレイフィア・ルキフグス！あなたを殺す相手の名前よ！」

そして私の戦いが始まった。最初はお互いに押していた。しかし、途中から私の魔法を消滅の魔法で消しに来て勝負はそこからは圧倒

的になつてしまった。

「ふ…これで私の勝ちが決まった!!」

グレモリーがそう言い放った瞬間。私の目の前に大きな消滅の魔力の塊が飛んできたが見えた。ああ、私の人生はここで終わりなのか……。せめてミスティアが大きくなって誰かと結婚するところを見たかったなあ……。そして私は目を瞑った。しかし、いつになつても私に衝撃が来ない。もしかしたら消滅というものだから衝撃も無くこの世から消えてしまったのではないか。そう思い、目を開けてみると……。よく見ていた有基の背中があつた。

side out

あつぶねー戻つたら、もう戦争が始まっていた。すぐにヴァンを見つけて話しかけてみた。

「ヴァン！これはどんな状況になつているんだ!？」

「おお！有基！今はグレモリーの奴が出てきた瞬間に急に押され始めたんだ！おそらくバアルの血筋のみが使える消滅の魔力が原因だと思う！グレイフィアが最前線で戦つてるから助けに行つてやつてくれ！」

「了解！」

そう答えた瞬間グレイフィアの魔力を見つけそこに急いで向かつた。

向かつて見つけたと同時に誰かと戦っているのを感じてまだ生きて

いたと安心していたら、グレイフィアに向かって消滅の魔力が放たれた。さすがにそれはマズイと思った俺はさつきもらったばかりの刀を取り出しその力を解放した。俺はものすごい速さでグレイフィアの前に行き、刀の力で消滅の魔力の力を半分にし続けた。俺に届いたころには豆粒くらいの大ささになり、それを防いだ。そして、後ろを振り向き声をかけた。

「大丈夫だったか。グレイフィア？」

どうやらかなりボロボロになっているみたいだった。服装は戦闘用の服装なのだろうけれどズボンもところどころ破れて上着も泥まみれになっていた。俺は疲れているだろうグレイフィアを抱きしめて能力を使っていつも通りの元気な姿に戻した。

これでグレイフィアは大丈夫だろう。さてと、問題はもう一つあったな。俺は振り向いて今までグレイフィアが戦っていた相手に向きあった。

「さて、バカ弟子……人の嫁を傷付けて無事でいられると思うなよ？」

「い……いや師匠これには色々わけがありました……。」

このバカ弟子にすこし痛い目にあってもらわないとな。

side サーゼクス

私は最左翼の指揮官を任されていたのだが、相手とこちらが互角の戦いをしていたので他の悪魔に指揮官を任せて私は相手の悪魔を引

きつける囷役になり。敵が集まっているところに突撃をした。その際自分の生まれながら持っていた消滅の魔力を最大限に使い悪魔をどンドン消していった。そして相手を大半消したと思いきろそる相手も突撃してくる思っていたら、予想通りこちらに突撃をかけてきた。こちらは作戦通りに指示を出して突撃をかけた。

「皆の者！敵の指揮官が出てきたぞ！全軍突撃せよ！」

命令を出して少したったら相手の指揮官がこちらに向かってきているのが見えた。そして、近づいてきてその顔を見た瞬間に私は一目ぼれをした。きれいな銀髪、クールそうな美人仕事がなんでもできそうな感じ。私はなんとしてもこの人を手に入れたいと思って、相手が一騎打ちを申し込んできた時に言ってしまった。

「よかろう！しかし、私は君に一目ぼれをした！だから私が勝ったら私の妻になつてもらおう！」

これで勝負を受けてもらい勝てば私の妻になつてもらえると思った。そして、その勝負を受けると聞いた瞬間私は何がなんでもこの勝負勝たなくてはならないと思い、これまでの全力を出して戦った。相手を殺さないように勝たなくてはならなかったので、消滅の魔力を使わないように戦っていたのだが、さすがは指揮官、使わないで勝てる相手ではなかった。そして、消滅の魔力を使って戦い始めたらそこからは圧倒的だった。そして、ついに勝ったと思いつい、興奮してしまったのか叫んでしまった。

「ふ…これで私の勝ちが決まった！！」

そして、これで私の恋は叶った！と思いついつい力んでしまい多量の魔力を込めてしまった。そして、かなり大きな魔力の塊を放って



しまい。これでは相手も消滅してしまうと思った瞬間、急激に魔力の塊が小さくなっていった。私はそれを疑問に思った。最初はルキフグスが何かをしたのか？と思っていたが、もう一人新たに人影が増えたのを見つけた。一騎打ちなのに、邪魔をしたのかと内心怒っていたが、よく目を凝らして見てみると知っている顔であった。そして、私の方を向き……

「さて、バカ弟子……人の嫁を傷付けて無事でいられると思うなよ？」

「い……いや師匠これには色々わけがありました……。」

私にとっての死刑判決を言い渡された瞬間であった。それと同時に私の初恋が終わってしまったのであった。

今思うとこの人と出会ったのは、とても偶然であったのだろうか。私がまだ幼かったころ、その日私は立ち入り禁止の森の中に入ってしまった。生まれながらにして消滅の魔力という最強に近い力を手に入っていたので、ドラゴンが相手でも余裕だと思つてどンドン奥の方に進んでいった。そして、奥に行くにつれて暗くなり静かになっていった。私は怖くなって帰ろうとしたのだが鳥が急に木々の中からはばたいてビックリしてしまい、軽い悲鳴をあげてしまった。

「うわあっ！」

次の瞬間後ろからものすごい勢いで何かが突進してきた。私はとりあえず消滅の力でそれを消そうとしたのだけど、制御することができなくて敵に当たらず、そこから違う所を消滅してしまって隠れるところも何も無くなってしまい。周りにあるのは私と敵のみ、その敵をよく見てみるとドラゴンではないのだからうけども、空を飛ぶた

めの翼はないが、その代り頭が岩石のような形をしていた。あの突進を食らったらひとたまりもないと思い、転がって避けた。相手も避けられたと思ひ方向転換してこちらにまた突進してきた。転がって避けたので次の動作が遅れてしまい、避けることができなくてやられると思った。その瞬間、誰かが私を抱えてその場から近くの木に飛び乗った。そして、こちらを向いたと思ったたら私の頬を叩いた。その人が私を助けてくれたのだと理解したのは頬を叩かれてからだった。

「ばかだろ！この辺にはドラゴンが住んでいるのかもしれないんだぞ！お前のような子供が来ていいところじゃないんだ！」

「ヒック……ごめんなざーい……もうこのばじょにきたりしません……ヒック……グス……。」

私は怖くて泣いてしまった。もしも、あの場で助けてもらうことができなかったのならば、私は死んでいたのだろう。だからもし死んでいたのならばと考えると怖くて震えてしまう。

「反省しているのならばもう大丈夫だろう。これからは気をつけるんだぞ？」

そういうと、その人は腕を軽く振るっただけで私を追い詰めたやつを再起不能まで追い詰めた。何が起こったのかはわからないが、私の消滅の魔力が最強だと思っていたイメージが崩れてしまった。そして、私の目標ができた瞬間でもあった。この人なら私を強く誰かを守ることのできる力を付けてくれると……。だから、泣きやんだ後に私は弟子にしてください！と頼んでみた。すると、私の目をじっと見てから快く肯定をしてくれた。うれしさのあまり走りまわっていたら、頭を叩かれてまた怒られてしまった。しかし、さっきの

ように怖いわけではない、むしろこれは嬉しい気持ちなのだろう。今まで父上や母上に怒られた時に近い感じがした。それから私たちは自己紹介をした。助けてくれた人の名前は水野有基というらしい。種族は悪魔かなあ？と思っっていると人間だったということがわかった。それから毎日のようにその森の近くにある滝に行って修行をしてもらった。魔力の制御から近接格闘、戦いで動き方などを3年ほど教えてもらって、その森の生物には一通り勝てるようになった。あの時の私がこのように戦えるようになるとは思ってもいなかった……。これもあの時、師匠に助けてもらったから強くなれた。

「バカ弟子……ちょっとこっちに来い。」

「はい？なんででしょうか師匠？」

突然師匠に呼ばれたと思いそちらの方へ行った。

「今日でお前を育てるのも終わりにする。教えることは何もない……ぶつちやけ育てすぎたせいか、つまらなくなってきた……。これからは自分で技を考えたりするといいさ。俺はどこかへ、また旅に行ってくるよ。」

私は悲しくなったが3年も教えてもらったのでこれ以上無理を言うてはいけないと思い笑顔で見送ることにした。結局、父上と母上に紹介することができなかったが、また会った時に紹介をしようと心に決めて……。

それから何年も経ち……私は自分を鍛え続けて最上位悪魔になり、その中でもトップに近いほど力をつけた。それから間もなく戦争が始まると聞いて私は最左翼を任されることとなった。戦争は嫌いだ、今の魔王の反対勢力に属してるので戦争にでないと私だけでは

なく家族までも裏切り者となってしまうので、参加せざるをおえな  
い……。

そして、戦争が進みグレイフィアとの出会い……。そして……  
… 師匠との再開……。私… 明日まで生きていられるかなあ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6311u/>

---

ハイスクールD×D 創成の人間

2011年10月22日02時25分発行